

[ 調査報告 ]

## 高校生の性教育に関する課題を探る

### —学校と家庭で享受した性教育と性への認識調査を通して—

増田 安代<sup>1,\*</sup>、今村 恭子<sup>2</sup>

**【要旨】**768名の高校生を対象に、学校や家庭で享受した性教育と性に関する認識について実態を把握し、今後の性教育への取り組みについて明らかにすることを目的に質問紙調査を実施した。調査結果から以下のことがわかった。学校での性教育は男女の性に関する生物的側面からの項目が多く取り組まれ享受率は高く、人間関係における性への取り組みは低かった。家庭での性教育の享受率は低く、取り組みへの啓発が必要である。保健師に対して性教育に関する活動を期待していた。性感染症や避妊の具体的方法に関するスキル、男女の人間関係等の「出前性教育」を、学校、家庭、保健所、関連機関等が連携を図り強化していく必要性がある

**キーワード：** 高校生、性教育、家庭、学校

#### 【緒言】

「性とは何か」と尋ねられた時、種族保存としての性、快楽としての性、つまり生物学的な性やSEXイコール性と考えられている傾向にある。特に情報化社会のなかで、商品としての性が氾濫し、興味本位として性がとらえられ、性の問題が大きくクローズアップされている。また、若者の間では、携帯電話やインターネットの利用が高く、携帯電話による「出会い系サイト」等、青少年への性行動に大きく影響を与えており、性体験や性感染症の低年齢化と増加が社会問題になっている。特に、近年高校生の性交体験率はマスメディアによると20～60%と言われており、2002年に産業医科大学医学部公衆衛生学(劔陽子 他)において、北九州市内の3つの高等学校へ性意識・性行動について調査した結果においても、約40%が性交の体験があり、避妊や性感染症に関しては無防備な状態にある生徒がいることを指摘している<sup>1)</sup>。

このような現状に対する実態調査を、小学生、中学生、高校生、大学生、勤労青年、保護者を対象に、全国規模においては、財団法人日本性教育

協会<sup>2)</sup>、厚生省性感染症センチネル・サーベランス研究班<sup>3)</sup>が、地域単位においては、東京都生活文化局<sup>4)</sup>、京都府・京都府教育委員会、京都市・京都市委員会<sup>5)</sup>、愛媛県松山中央保健所<sup>6)</sup>等が実施し、健全な性の育成にむけての課題を提示し、時代とニーズにあった性教育にむけて熱心に取り組んでいる。なお、望月は、高校生のニーズに対して現在の性教育では満足されていない状況を<sup>7)</sup>、深江は、性問題について日本における性教育の不足や親や教師が真剣に取り組んでいない現状を問題にあげている<sup>8)</sup>。

筆者らもこれらの調査結果から、今後の性教育において具体的な知識と避妊のスキルの習得にむけた教育方法の見直しや連携の在り方への検討が必要であると考えている。そして、特に家庭における性教育への取り組みの報告がわずかであったことにも着眼していく必要性があると考えている。日本においては、まだまだ家庭において性がオープンに語られることが少なく、プライベートな秘密のこととして考えられたり、タブー視されている側面がある。そして、家庭において乳幼児期から学童期、思春期、青年期と発達に応じた性教育

<sup>1)</sup>九州看護福祉大学 看護福祉学部看護学科、<sup>\*</sup>連絡先、<sup>2)</sup>佐賀大学医学部付属病院

への取り組みが比較的希薄であり、学校におまかせという感がある。また、家庭と学校、専門職が連携して性教育へ取り組んだり、両親への性教育への認識を高めたり、具体的な指導や相談に応じるなどのサポートがとられていない現状がある。

それで、今回、身体的にも成熟にむかい、性的関心や欲求が高まり、健全な性意識・性行動についてのスキルを取得していく重要な青年前期にある高校生を対象に、学校や家庭で享受した性教育と性に関する認識について実態を把握し、今後の性教育への取り組みの課題について明らかにすることを目的に本研究に取り組んだ。

## 【方法】

### 1. 対象者

某高等学校1年生282名、2年生276名、3年生307名、総数865名、回収率91%（788名）記載不備なものを除外した結果有効回答率89%（768名）であった。

なお、有効回答数の内訳は、1年生276名（男子135名、女子141名）、2年生241名（男子110名、女子131名）、3年生251名（男子114名、女子137名）、総数768名（男子359名、女子409名）である。

### 2. 方法

1) 調査期間：2003年5月26日から5月30日

2) 調査方法：自記式の質問紙調査、5日間の留め置き法。（5月26日、授業終了時に研究者が生徒へまず調査の目的や意図を説明した後に質問紙を配布した。5月30日に研究者が回収した。）

3) 調査項目：(1)基本属性；学年、性別 (2)調査内容；1992年の学習指導要領の小学校・中学校・高等学校における性教育の必須単元の改訂されたものを参考に学校および家庭で受けてきた性教育の内容11項目、性教育の実施者（性教育は誰が実施すべきか）12項目、避妊の方法に関するもの8項目、性感染の種類に関する9項目、メディアの利用状況に関する4項目、性問題への認識2項目について筆者らで作成した。

3. 分析方法：調査項目毎にエクセルで単純集計し、比率をだし比較・検討した

4. 倫理的配慮：校長、担任、養護教諭、生徒に研究の目的を説明し同意を得た。

## 【結果】

### 1. 学校における性教育

3学年の総数において70%以上であった項目は6項目で、「男の子と女の子の体の構造の違い」「第二性徴」「性感染症」「思春期のころ」「月経と女の子の生活」「射精と男の子の生活」の順であった。次に各学年別において70%以上の項目は、1年生では「射精と男の子の生活」を除いた5項目、2年生では同様の6項目、3年生では「避妊の方法」「人口妊娠中絶」が加わり8項目であった。結果は、表1参照。

### 2. 家庭における性教育

家庭において受けた性教育については、3学年の総数において10%以上の項目は3項目で、「月経と女の子の生活」「第二性徴」「男の子と女の子の体の構造の違い」の順であった。「男女の良い関係」は9%であった。次に各学年別において10%以上の項目は高い順に、1年生では「月経と女の子の生活」（女子57%、男子1%）、「第二性徴」「男の子と女の子の体の構造の違い」の順であった。2年生では、「月経と女の子の生活」（女子60%、男子4%）、「第二性徴」「男の子と女の子の体の構造の違い」「思春期のころ」の順であった。3年生では、「月経と女の子の生活」（女子43%、男子4%）、「第二性徴」「男の子と女の子の体の構造の違い」の順であった。結果は、表2参照。

### 3. 性教育の実施者

性教育の実施者において学校関係者では、3学年の総数及び各学年において、「保健体育の先生」「養護教諭」「外部講師」「担任の先生」の順で高かった。学校関係者以外では、3学年の総数では、「保健師」「母親」「助産師」「父親」の順であった。各学年においても、ほぼ同様の順であった。結果は、表3参照。

### 4. 避妊の方法について

避妊の種類に対する現在の知識は、3学年の総数では、「コンドーム」「経口避妊薬ピル」「避妊

手術」「基礎体温法」の順で高かった。次に各学年別にみると、「コンドーム」は、1年生、2年生、3年生共に90%以上を占めていた。「経口避妊薬ピル」は、1年生、2年生共に60%以上で、3年生は85%であった。なお「経口避妊薬ピル」への女子の認識は、1年生、2年生共に70%前後を占め、3年生は88%であった。なお、3年生において「基礎体温法」「ペッサリー」が、60%以上を占めていた。「基礎体温法」に対する女子の認識は、1年生8%、2年生21%、3年生66%であった。1年生、2年生共に3番目に高かったのは「避妊手術」34%で、他の項目においては低率であった。結果は、表4参照。

#### 5. 性感染症の種類への認識

性感染症の種類に対する現在の知識は、最も高かったのが3学年の総数においては、「エイズ」の98%で、1年生、2年生、3年生共に100%近くを占めていた。次に高かったのは、「クラミジア感染症」61%で、1年生43%、2年生62%、3年生80%であった。次は、3学年共に「ケジラミ」、「梅毒」の順であった。なお、「ケジラミ」「梅毒」は、2年生、3年生ともに50%前後であった。結果は、表5参照。

#### 6. メディアの利用状況と性問題への認識

「自分専用の携帯電話やPHSを持っている」と答えた生徒は、3学年の総数において81%(626)であった。1年生は77%(213)で、男子73%(98)、女子82%(115)、2年生は85%(204)で、男子78%(86)、女子90%、3年生は83%で、男子75%(86)、女子90%(123)であった。「インターネットを良く利用している」と答えた学生は、3学年の総数において47%(363)であった。1年生は43%(119)で、男子41%(55)、女子45%(64)、2年生は49%で、男子53%(58)、女子45%(59)、3年生は51%(127)で、男子51%(58)、女子50%(69)であった。「出会い系サイト」どのように考えるのかについては、3学年共に・使い方を間違えば危険・相手の顔がわからない、一歩間違えば事件や犯罪に巻き込まれるから危険・悪いことに利用される危いもの・少し興味があるけど危険、純粋に出会いを求める人はいないと思うから危険・絶対利用しない方がいい。

悪用されるからやらない方がいい」と等と記述され、ほとんどの学生が、否定的な考えをもっていた。なお、少数ではあったが肯定的な意見として、・ネット上の遊び・限度を超えなければいいと思う・ただの遊び、大人の遊び・顔も知らない人と出会える・出会いのひとつ・友達や彼氏ができる・出会いを求める場所を提供する所、出会うためのサイト・深入りしなければ個人の自由・未知の世界・欲求不満を満たすもの・たまり場が記述されていた。「出会い系サイトに興味がある」と答えた生徒は、3学年の総数は、5.3%(41)であった。1年生は4%(12)で、男子2%(3)、女子6%(9)、2年生は8%(19)で、男子7%(8)、女子8%(11)、3年生は4%(10)で、男子4%(4)、女子4%(6)であった。「出会い系サイトを利用したことがある」と答えた生徒は、3学年の総数において4.6%(36)であった。1年生は3%(7)で、男子1%(1)、女子4%(6)、2年生は6%(14)で、男子5%(5)、女子7%(9)、3年生は6%(15)で、男子5%(6)、女子7%(9)であった。理由は、・暇つぶし・友達をつくりたかった・どんなのか興味があったから・メル友が欲しかった・遊び感覚でやっていた。会った男におそわれそうになった・異性の友達を探すもの・携帯電話でだまされて自動的に登録されてしまった。少し恐かった・学校のことなど話したいから等が記述されていた。

#### 【考察】

今回の調査結果から、実態をふまえ今後の性教育への取り組みについて検討したことについて述べていく。

まず、学校での性教育の享受についてみると、生物学的な側面からの性への項目、「男の子と女の子の体の構造の違い」「第二性徴」「月経と女の子の生活」「射精と男の子の生活」「性感染症」が高位を占めていた。しかし、「人間の性交行動」「性の問題行動」は6割以下であった。併せて、「避妊の方法」では、1年生49%、2年生65%、3年生89%と高学年になると認識が高くなってきていることから、高学年になるとともに享受され

ていることが推察される。

高校生の半数は性交体験を有していると言われている。また、木原の調査によると、初交年齢の早まり、同年齢を相手にしたり多数の相手をもつ傾向、性交までの期間短縮について報告している<sup>9)</sup>。

現代の若者のこのような傾向は、性に関して氾濫する情報のなかでの生活や性の商品化の中にどっぷりつかっており、正しい性への知識やモラルの欠如、人間関係や絆の希薄さからくる心の貧困さに起因することが考えられる。それで、「人間の性交行動」「性の問題行動」「避妊の方法」については、中学校教育との連携・継続のなかでプログラム化され、高校入学時から早期に取り組み、1年生の時から100%の生徒が認識しているような強化が急務であると考えられる。また、各学年を通して具体的な避妊の方法のスキルについて、専門職が介入し取得できるような展開も必要なのではないだろうか。

なお、「男女の良い関係」は5割しか占めておらず、3学年共に差異はさほどみられなかった。この項目については、小学校・中学校から取り組まれているが、青年前期にある生徒にとって一層メンタルな側面から重要になってくるし、“より良い人間関係”としての性として価値志向の教育が求められる。それで、発達段階に応じた積み重ねの教育（幼稚園・小・中・高校）でもあり、単に学校のみならず家庭での取り組みも重要になってくる。そうした時、大人そのものがどのような性への価値意識をもっているかが大きな問題となってくる。大人が、快楽性としての性のみならず、連帯性や親密性としての性という起点にたつ性意識、つまり大人そのものの性意識改革を必要とすることから、真に取り組んでいこうとした時に一見取り組みやすそうで難しい状況がある。

そこで、ひとつの案であるが、高等学校において、「男女の良い関係」をベースにおき、「これから父親になる母親になるということ」という項目を併せて設置する。その中で、社会的役割としての父性・母性意識の教育をしたり、育児に関する（抱く、オムツ交換、哺乳瓶での哺乳等）実技を取り入れて、男女の関係における責任について自覚させるような場をつくっていくことも時代背景

から必要ではないだろうか。

ところで、高校の保健体育の教科書に「性病」と「エイズ」について載せてあるにもかかわらず、性感染症の認識が低い傾向にあったことに注目する必要がある。性感染症の種類への知識で9割以上を占めていたのは、エイズのみであった。避妊の方法においても9割以上を占めていたのは、コンドームのみであった。

産業医科大学公衆衛生学（劔陽子 他）の調査によると、高校生の39.3%（男子38.2%、女子46.1%）が性交体験を有し、「初めてのセックスの時避妊していた」55.8%、「現在セックスの時いつも避妊している」32.3%、また、初めての経験の時、女子は「自分は望んでいなかったが相手に求められて同意した」38.4%という結果をえている。<sup>10)</sup> また、斉藤らも避妊の実行率は女子46.2%、男子45.8%であり、半数以上が避妊を実行しておらず、なかには妊娠中絶にいたったケースもあったと報告している<sup>11)</sup>。岡山市内医師会連合会・岡山市「安全な妊娠・出産のための性感染予防」検討委員会が実施した高校生への調査において、「性について知りたいこと」でもっとも高かったのが「性感染症」で、男子27.0%、女子29.1%という結果をえている<sup>12)</sup>。

近年、性感染症が若者の間で増加傾向にある。不妊症や流産の原因になる性感染症の予防、健全な妊娠と出産のうえからも重要で、中高生を対象にした「出前性教育」がおこなわれてきている。そうした時、性感染症や避妊に関する具体的な知識とスキルを中学時代から高校にかけて100%取得できるような教育が、生徒のニーズもふまえ非常に必要である。

今回の調査から、性感染症や避妊への知識の強化が大きな課題としてあげられるが、避妊の方法の種類を知っていることと実際の正しい使い方ができることは異なる。今回、具体的な使用方法への知識については調査をしていないので、検討事項として残されている。

上記の課題に関して女子生徒に着目すると、基礎体温は、1年生6%、2年生16%、3年生62%と高学年になるほど認識は高くなっているとはいえ低率である。一般に初経は10歳前後くらいにお

こり、高校生になると月経周期が安定してくる。高校生で自己の性周期について知ることは、望まない妊娠や性感染症のリスク防止、性への自己決定の力をつける上で必須である。それで、高校に入学すると同時に(できれば中学の高学年から)基礎体温計の購入を義務づけ、性周期を把握させる必要がある。特に養護教諭は、女子生徒が、自分の身体に関心を持ち体を大切にしていけるような関わりは重要なので、基礎体温測定の具体的指導や性周期への相談等を受けていけるような窓口となっていく必要があるのではないだろうか。

なお、「自分専用の携帯電話・PHSを持っている」と答えた高校生の総数は8割であり、東京都生活文化局の調査<sup>13)</sup>と同様の結果をえた。また、「出会い系サイトを知っている」と回答した高校生の25.8%が「責任をもって慎重に利用すれば問題はない」と考えていた。今回、「出会い系サイトに興味がある」「出会い系サイトを利用したことがある」については、非常に低率であった。これは、都市から比較的離れた地域の生徒であったこととの関連が考えられるが、PHSによる性の問題は今後増加していくことが予測されるので、上記でも述べたが、「男女の良い関係」について考えさせたり、「避妊の方法」へのスキルが身につくような展開は、急務である。

次に、今回の調査から、「性教育はだれが行うべきか」という設問において、保健体育の教員65%、養護教諭43%、保健師42%、助産師14%であった。この結果から、学校において主に保健体育の教員がおこなっていることが伺える。筆者らも高校時代に保健体育の時間に種々の性教育が組み込まれていたが、一般的なもので終わっていた感がある。

今回、筆者らの予想より、養護教諭は低かった。養護教諭も専門的な立場を活かして、生徒の認識のなかに高位を占めるような積極的な展開が必要なのではないだろうか。例えば、小グループ単位での取り組みや個別のニーズにそくした展開や工夫、専門職との連携を図った継続的な教育・相談等である。

地域における相談者としては、5割弱が保健師を認識していた。性感染症や性問題における保健

師の広報活動や取り組みを地域社会との関連で認識していることが推察され、保健師に対して性教育に関する活動を期待していることが伺える。そこで、今回助産師へは低かったが、何らかの形で両者が連携を図り、学校教育へのサポートや地域で現在着目されている「出前性教育」へ何らかの形で早急に取り組んでいく必要があるのではないかと考える。そして、性に関して助産師が専門分野なので、施設業務のみならず、その専門性を活かすためにも対象や場の広がりを意識した活動への問い直しが必要ではないのではないだろうか。

なお、家庭教育についての性教育の享受についてもみてみると、今回、生徒を通しての調査結果であるが、家庭において実施されている性教育において10%以上占めていたものは、「月経と女の子の生活」30%、「第二性徴」20%、「男の子と女の子の体の構造の違い」14%のみで、他の項目は10%以下であった。

新潟県青少年問題協議会が高校生の保護者624人に子どもにおこなっている性教育の調査においても、「男女のからだと心」12.8%、「第二性徴」11.1%、「生命誕生」19.6%、「性の健康」22.3%であり、「ほとんどおこなっていない」と答えた人は59.6%であった<sup>14)</sup>。今回の調査結果もほぼ同様の傾向がみられ、両親があまり子どもの性にむきあったり、関与していないことが伺える。これは、家庭における取り組みが希薄であることを意味しており、このことは大きな問題である。

性教育は誰が行ったほうが良いかについて、母親17%、父親9%と非常に低かった。これは、上記の家庭における取り組みの状況と関連していることが推察される。この時期は、両親と性に関する会話は大切である。しかし、男子をもつ父親の関与や夫婦が家庭のなかで男女の健全な関係について、幼少の頃からオープンに話せるような家庭環境があって実現するものであり、日本人の性認識の在り方への見直しが示唆された。

筆者は、平成15年、中学校の父兄会において、「家庭における性教育」というテーマで講師依頼を受けた。受講者21名の家庭における性教育の実施状況については、「家庭で取り組んでいる」と答

えた人は38%(8)で、理由は、・十代の人工中絶が増加しており性について考えて欲しい為 ・子どもへ自分の身体、男女の身体、性の違いと大切さを教えることは、これからの自分の生き方を考えるうえで必要だから ・女の子なのでもし何かあった時の為に 等であり、コンドームの使い方の実際を教えている人が1名いた。

「家庭で取り組んでいない」と答えた人は62%(13)で、理由は、・実際家庭での性教育が大事というのはわかっているがきっかけがわからないし、何から話してよいのか戸惑う・特に向かい合って話しをしたことがない。自然にわかってくるものと思っていた ・特別性教育をしたことがないが、兄弟4人両性の思春期の子供たちのなかで相手を知り、性の違いを認め合うことの体験が多いと思う等であった。

中学生の父兄ではあったが、家庭において性教育の必要性は認識していたとしても、戸惑いや自然にわかっていくだろうという様な考えにより、同様に真正面から取り組まれていない現状があった。

岡山市内医師会連合会・岡山市「安全な妊娠・出産のための性感染予防」検討委員会が実施した高校生への調査において、「性について知りたいこと」で、「愛とは何か」について男子21.4%(193)、女子24.5%(101)、また男子は「異性との交際の仕方について」25.6%(231)、女子「男性と女性の心理や行動の違い」25.5%(105)をあげている<sup>15)</sup>。

これらの調査から生徒は、男女関係の在り方について考えていきたいニーズをもっている。

性教育というと大上段に構えがちである。子育てを夫婦で協力しておこなう。立派な性教育である。構えをすててもっと楽な感じで、家庭環境の中で夫婦が尊重しあい助け合う後姿を通して、また、親子関係を大切に、性イコール下半身ではなく、思いやりや人間関係、愛について語りあうなかで、自然な形で取り組んでいくことが大切なのではないだろうか。自分の子どもが性問題にいつ巻き込まれていくかわからない状況にある現代社会において、学校におまかせではなく、自分の子供と性について語りあうことは、親としての責

任でもあるのではないだろうか。子供は親との対話をひそかに願っているのではないだろうか。また、子供と語り合うことで自己の性への認識について問い直す機会にもなるのではないだろうか。

日本においては、オープンな性教育の取り組みは、北欧諸国と比べれば貧しい現状がある。性教育をセックス教育と考えている傾向があり、セクシュアリティとしての教育という視点が少ない傾向にある。そこで、筆者らは、子育て支援のひとつとして、専門職同士(性にたずさわる助産師や医療従事者・保健師・教育関係者等)がチームをつくり、地域の人々に対してパーソナリティ形成としてのライフサイクルに応じた性教育について啓発活動を展開したり、また、子どもの性の相談相手になれるような両親の育成にむけて、相談・援助がおこなわれるようなサポート体制を行政と教育委員会が連携してつくっていく必要があると考えている。

今回の調査にあたり、寝た子をおこすなというような考えもあり、具体的な避妊の方法への知識や実施状況、性体験や具体的な性教育へのニーズ等に関する調査はむづかしい側面があった。教育委員会やPTA、精神保健センターや保健所、学校、大学等が連携して、より繊細な実態調査がおこなわれる必要がある。また、小学生の性教育は2002年から4年生からと時期が早められている。高等学校における性教育について改めて問い直して見る必要があるのではないだろうか。そして、我々大人そのものも若者の性意識に対して隔絶するのではなく、正しい性意識への形成にむけて責任をはたしていく必要があるのではないだろうか。そして、現在の社会情勢からの判断と高校生のニーズにあった出前性教育を地域全体で連携し実践し、ライフスキルトレーニングを組み入れた性教育への取り組みが中学校から実施されていく必要性を、筆者らは痛感している。

**【結論】** 今回の調査から以下の課題があげられた。

1 学校における性教育は、男女の性に関する生物的側面からの項目が多く取り組まれ享受率は高かった。しかし、「人間の性交行動」

- 「性の問題行動」「避妊の方法」「性感染症」については、中学校教育との連携・継続のなかでプログラム化され、高校入学時から早期に取り組み、認識の確認を図っていく必要がある。
2. 「男女の良い関係」は5割しか享受されておらず、性教育をセクシュアリティやパーソナリティとしての見地から、学校と家庭で協力して取り組まれる必要がある。
  3. 「避妊の方法」では、コンドームへの認識は高かったが、基礎体温への認識は低かった。また、「避妊の方法」への具体的な方法を取得できるような取り組みが必要である。
  4. 生徒は、保健師に対して性教育に関する活動を期待していた。なお、養護教諭、助産師、保健師等が、学校教育のなかで専門職の立場から性教育に積極的に介入し取り組んでいく必要がある。
  5. 家庭において性教育の取り組みが気薄であり、両親が子供と向き合えるようなサポートが必要である。

### 【文献】

1. 劔陽子 山本美江子 松田普哉. 北九州市内の高校3校における性意識・性行動. 日本衛生学雑誌.2002; 56 (4)
2. 財団法人日本性教育協会. 青少年の性行動. わが国の中学生・高校生・大学生に関する第5回調査報告. 2000;6~7
3. 厚生省性感染症センチネル・サーベイランス研究班. 日本における性感染症(STD)流行の実態報告—1999年度STD・センチネル・サーベランス報告— . 日性感染症会誌.2000;11 .72~103
4. 東京都生活文化局. 青少年をとりまくメディア環境調査報告. 教育アンケート調査年鑑上. 創育社. 2002;73~179
5. 京都府・京都府教育委員会、京都市・京都市委員会. 青少年と携帯電話等に関する調査 結果について. 教育アンケート調査年鑑上. 創育社. 2002; 181~191
6. 愛媛県松山中央保健所. 高校生の生活状況と性に関する意識. 教育アンケート調査年鑑下. 創育社. 2001; 831~845
7. 望月良美. 高校生の行動特性と性意識・性行動からみた性教育に関する一考察. 思春期学雑誌. 1999;17:204~209
8. 深江誠子. 日本の性教育の問題点. 平安女学院大学研究年報. 2001; 2: 35
9. 木村正博他. 日本人のHIV/AIDS関連知識, 性行動, 性意識についての全国調査. 教育アンケート調査年鑑上. 創育社. 2001; 94~105
10. 産業医科大学医学部公衆衛生学 劔陽子 山本美江子松田普哉. 北九州の高校3校における性意識・性行動調査. 教育アンケート調査年鑑上. 創育社. 2002; 196
11. 斉藤益子 他. 高校生の性意識と性行動に関する実態 - 都内某公立高校における調査成績 -. 思春学. 1999; 17(2):267
12. 岡山市内医師会連合会・岡山市「安全な妊娠・出産のための性感染予防」検討委員会. 中・高校生の性行動・性意識の実態アンケート調査. 教育アンケート調査年鑑下. 創育社. 1999; 980
13. 東京都生活文化局. 4と同掲載. 2002; 174
14. 新潟県青少年問題協議会. 青少年の生活実態と意識の現状. 教育アンケート調査年鑑下. 創育社. 1999;221
15. 岡山市内医師会連合会・岡山市「安全な妊娠・出産のための性感染予防」検討委員会. 同11掲載. 1999; 980

表1．学校における性教育の取り組みの状況

項 目	3年生	2年生	1年生	全体
男の子と女の子の体の構造の違い	92 (232)	95 (228)	93 (257)	93 (717)
第二次性徴[初経・月経、射精]	90 (225)	91 (219)	86 (237)	89 (681)
射精と男の子の生活	77 (194)	73 (175)	66 (182)	72 (551)
月経と女の子の生活	80 (200)	76 (183)	70 (193)	75 (576)
思春期のころ	83 (209)	80 (194)	75 (208)	80 (611)
人間の性交行動	65 (163)	52 (125)	45 (124)	54 (412)
男女のよい関係	57 (144)	55 (133)	42 (115)	51 (392)
避妊の方法	89 (223)	65 (157)	49 (136)	67 (516)
人工妊娠中絶について	76 (192)	37 (88)	33 (90)	48 (370)
性感染症について	90 (227)	86 (208)	73 (201)	83 (636)
性の問題行動について	63 (157)	52 (126)	39 (108)	51 (391)

数値は% ( )の中は人数を示す

表2．家庭における性教育の取り組みの状況

項 目	3年生	2年生	1年生	全 体
男の子と女の子の体の構造の違い	14 (36)	17 (41)	10 (27)	14 (104)
第二次性徴[初経・月経、射精]	21 (52)	24 (57)	17 (46)	20 (155)
射精と男の子の生活	5 (13)	4 ( 9)	4 (11)	4 (33)
月経と女の子の生活	25 (63)	34 (83)	29 (82)	30 (228)
思春期のころ	4 (11)	10 (24)	5 (15)	7 (50)
人間の性交行動	4 (10)	5 (12)	3 ( 9)	4 (31)
男女のよい関係	8 (19)	13 (31)	8 (22)	9 (72)
避妊の方法	7 (18)	8 (19)	4 (11)	6 (48)
人工妊娠中絶について	2 ( 5)	4 ( 9)	4 (11)	3 (25)
性感染症について	2 ( 6)	5 (12)	6 (17)	5 (35)
性の問題行動について	2 ( 6)	3 ( 8)	3 ( 8)	3 (22)

数値は% ( )の中は人数を示す

表3．性教育の実施者(誰が行うべきか)について

項 目	3年生	2年生	1年生	全 体
クラス担任	14 (35)	8 (20)	13 (37)	12 (92)
養護教諭	45 (114)	44 (107)	39 (108)	43 (329)
保健体育の先生	65 (164)	66 (159)	63 (174)	65 (497)
校長・教頭	3 ( 7)	3 ( 7)	1 ( 2)	2 (16)
生物の先生	4 (10)	1 ( 3)	1 ( 4)	2 (17)
外部講師	33 (83)	36 (86)	21 (57)	29 (226)
保健師	35 (89)	49 (118)	42 (116)	42 (323)
助産師	12 (30)	15 (35)	15 (41)	14 (106)
父親	14 (35)	8 (20)	4 (12)	9 (67)
母親	20 (51)	17 (40)	13 (36)	17 (127)
祖父・祖母	1 ( 2)	1 ( 2)	0 ( 0)	1 ( 4)
その他	4 (11)	5 (11)	4 (10)	4 (32)

数値は% ( )の中は人数を示す



表4. 避妊の方法への認識

項目	3年生	2年生	1年生	全体
コンドーム	99 (249)	98 (235)	93 (258)	97 (742)
ペッサリー	61 (154)	13 (32)	4 (12)	26 (198)
経口避妊具[ピル]	85 (214)	66 (160)	62 (171)	71 (545)
基礎体温法	62 (155)	16 (38)	6 (17)	27 (210)
オギノ式	33 (82)	11 (26)	8 (22)	17 (130)
殺精子剤	31 (78)	15 (35)	11 (29)	18 (142)
避妊手術	47 (119)	34 (81)	34 (95)	38 (295)
その他	0 (0)	2 (4)	0 (0)	1 (4)

数値は% ( )の中は人数を示す

表5. 性感染症の種類への認識

項目	3年生	2年生	1年生	全体
エイズ/HIV	99 (248)	97 (233)	99 (272)	98 (753)
クラミジア感染症	80 (201)	62 (150)	43 (119)	61 (470)
ケジラミ	54 (136)	52 (126)	21 (57)	42 (319)
梅毒	52 (131)	47 (113)	20 (54)	39 (298)
尖形コンジローマ	20 (51)	21 (50)	7 (19)	16 (120)
淋菌感染症	22 (55)	15 (37)	9 (25)	15 (117)
ヘルペスウイルス感染症	18 (45)	21 (50)	16 (44)	18 (139)
カンジダ感染症	16 (40)	17 (42)	10 (28)	14 (110)
トリコモナス感染症	14 (35)	7 (16)	6 (16)	9 (67)

数値は% ( )の中は人数を示す

[ Report ]

## Issues Surrounding Sex Education for High School Students

– through Questionnaire Survey Targeting High School Students –

Yasuyo Masuda<sup>1,\*</sup>、Kyoko Imamura<sup>2</sup>

<sup>1</sup> *Kyushu University of Nursing and Social Welfare*

<sup>2</sup> *Saga Medical School Hospital*

### 【Abstract】

A questionnaire survey of 768 high school students regarding their sexual awareness and the sex education provided at home and school was conducted to elucidate the challenges for the future sex education. It produced the following results. 1) The sex education at school, mainly on biological differences of men and women, was widely conducted and enjoyed, whereas fewer efforts were made to teach facts of life in the context of human relationship. 2) The sex education was not much offered at home; an action must be taken to disseminate its necessity. 3) Students expected public health nurses for their initiatives on sex education. 4) Schools, homes, public health centers, and other relevant organizations must reinforce their cooperation to coordinate “visiting sex education” that covers issues such as sexually transmitted diseases, methods of contraception, and man-woman relationship.

**Key words :** high school student, sex education, home, school

---

\*Corresponding author , FAX : +81 - 965-75-1844 ,